輕症脚氣患者の臨床統計

Statistical of the Beriberi Casess in Out Patient Clinic

柳 金太郎
(Kintaro Yanagi)

終戦後全国的に白米を常食とする傾向が増加し、戦時中殆んどその影を絶つたといつても良い程の脚氣が再び増加の傾向を辿りつつあることは、余が夙に指摘したところであつて、厚生省の全國栄養調査の成績並に余自らの行つた統計に基づいてこれを實證して昨年の栄養食糧學會總會において發表したところである。然るに日本人の主食たる米はそれを白米として攝取することが國民の殆んど決定的な要求であり、一方において米の搗精技術上の難點や貯藏上の條件からいつても白米使用が要望されかつ白米とすることによつて、糠と胚芽との不經濟なる徒費が救われて、油料資源、家畜の蛋白資源などとしての利用が確立すれば食糧資源の面から見ても合理的である等の諸條件が附隨するので、白米常食を國民今後の食形式として認めざるを得ない現状となつてゐる。然るにこれと關聯して最も考慮されねばならない國民保健上の重要問題は糠質消費量と不可分なるビタミン B₁ の補充問題である。ビタミン B₁ が白米を主食とする日本人に果して充分であるか不足するかは重要な問題であつて、若し缺乏の度が保健上不問に附し得ない程度であれば、それを如何にして補充するかが次の重要な課題となるわけである。

既述の通り栄養調査から知り得る範圍でも、都市、農村を通じて約 1 割程度の膝蓋腱反射消失の症狀を認め得る所であり、しかもそれが逐年増加の傾向を示しているのである。余自身が調査した近年の農村 3 カ所においては膝蓋及びアヒレス腱反射消失の症狀による脚氣罹患率は^{(3),(4)}いずれも約 20% に達している。又ビタミン B 研究委員會においては多數の研究者の綜合的意見として、現在の日本人には⁽⁵⁾ほぼ中等度以上のビタミン B₁ 缺乏があると斷定している。

余はこの種の資料を増加する一助として、本年 8 月中に我が内科外來を訪問したる患者全部につきビタミン B₁ 缺乏に基づく症狀が何の程度の頻度に認め得るかを調査したので、以下これを簡単に報告する。

(調査人員並に調査方法)

昭和 26 年 8 月 1 日より 9 月 5 日に至る外來診察日約 30 日において來診者各人 1 回として次の項目について検査した。即ち脚氣症候として挙げられるものの中で心臓所見、食慾障礙、便秘、倦怠感等は他の疾患に基因するものととの鑑別が困難であるから除外して、膝蓋及びアヒレス腱反射の變化、知覺鈍麻、浮腫、腓腸筋壓痛及び最小血壓の低下の 6 項目をいわゆる輕症脚氣の症狀從つてビタミン B₁ の缺乏症狀として採用し、各患者につき専ら症候本位の検査を行い、診斷は後にこれら症候中の 2 個以上を有する者を脚氣として計上したのである。勿論これらの症候中でも他に明かなる原因的病名の附された者即ち心臓病並に腎疾患における浮腫、神經疾患における知覺鈍麻等は除外したのである。

被檢人員は第 1 表に示す通り、年齢 14 歳より 70 歳以上に及ぶ男女合計 375 名で男女ほぼ同數を占めておりその中過半數は 20~40 歳間の成人であつた。(第 1 表) この中で上述のごとき定義に從つて脚氣と診定された者は、男 186 名中 40 名(21.5%)、女 189 名中 69 名(36.5%)であつて女に多く、合計 109 名(29.0%)である。即ち外來患者中に約 30% の脚氣症狀保有者を見るのである。その所有症候の頻度を見ると第 2 表のごとくである。(第 2 表) 即ち膝蓋及びアヒレス腱反射の變化がそれぞれ約半數に認められ、次いで腓腸筋壓痛、最小血壓の下降、知覺鈍麻、浮腫の順に減少している。これら患者の職業關係を見ると第 3 表のごとくであつて、男では

第 1 表 内科外來患者の年齢分布

年 齡	14 ~ 19	20 ~ 29	30 ~ 39	40 ~ 49	50 ~ 59	60 ~ 69	70 以上	合 計
男	20	90	30	14	16	15	1	186
女	20	90	35	19	19	5	1	189
合 計	40	180	65	33	35	20	1	375

第2表 脚氣患者の症状程度

症 候 名	男	女
膝蓋腱反射消失	20.0	17.4
減弱	27.5	34.8
	47.5%	52.2%
アヒレス腱反射消失	15.0	11.6
減弱	17.5	40.6
	32.5%	52.2%
最小血圧下降 (60mm Hg 以下)	45.0%	30.4%
排腸筋痙攣著明 程度	30.0	31.9
	12.5	15.9
	42.5%	47.8%
知覚鈍麻著明 程度	15.0	23.2
	2.5	8.7
	17.5%	31.9%
下腿浮腫軽度 痕跡	5.0	4.3
	7.5	8.7
	12.5%	13.0%

第3表 脚氣患者の職業別分布

男	女
事務員 11	主婦 25
会社員 6	事務員 17
無職 6	無職 16
學生 4	女中 3
商人 2	店員 2
外交員 2	教員 1
工員 1	美容師 1
吏員 1	時計工 1
桶屋 1	妊婦 1
製本業 1	農業 1
運轉手 1	踊子 1
印刷工 1	
巡査 1	
酒造業 1	
観相師 1	
合計 40	合計 69

事務員、会社員、無職者の範圍に多く、女では主婦に斷然多く、次で事務員、無職者等の順となつて居る。(第3表)
更に全被検者について、最小血圧が聴診法で第4點で 60 mm Hg 以下となつて居る者を下降者として取り、又脈搏数が1分間 60 至以下となつて居る者を徐脈として取つて見ると第4表の示す通りである。(第4表)この數値は全部がビタミン B₁ 缺乏に基づくものとは斷じ難いが、その主要原因としては認容し得るところであつて

第4表 全被検者中の最小血圧下降と徐脈との程度

項 目	男	女
最小血圧下降 (60 mm Hg 以下)	$\frac{39}{186} = 21.0\%$	$\frac{38}{189} = 20.1\%$
徐脈 (60/min 以下)	$\frac{14}{186} = 7.5\%$	$\frac{8}{189} = 4.7\%$

最小血圧の下降から見ても全員の約 20% 内外には B₁ 缺乏を示す徴候があると考えても差支ないようである。

余は先年泉橋慈善病院内科における脚氣患者を昭和元年から 10 年にわたつて集計したことがあるが、年々約 10~19% 平均 12% 位であつた。戦前の好況時代でしかも比較的下層階級の人々の間で脚氣が 12% 前後であつたことを見れば、今日の余の成績たる 30% は明かに高率であると見て良いところで、一般家庭の健康人ではこれほどでないとしても、これに近い高率に B₁ 缺乏症状の存することは推察に難くなく、余の調査による農村人では平均 20% にこれを認め、澤田氏は尿反應によつて潜在性 B₁ 缺乏を 50% に認めていることは決して偶然ではないと信ずる。

以上の成績から見て現今の日本人中にはビタミン B₁ 缺乏の状態が明かなる高率において存在するものと信ずる。

文 献

- (1) 柳金太郎外：栄養學雜誌，Vol. 7, No. 6, 昭和 24 年 11 月。
- (2) 同 上：栄養食糧學會總會，昭和 25 年，5 月。
- (3) 同 上：栄養學雜誌，Vol. 8, No. 1~2, 昭和 25 年 1~3 月。
- (4) 同 上：同 上，Vol. 9, No. 2, 昭和 26 年 3 月。
- (5) ビタミン B 研究委員會：ビタミン，Vol. 4, No. 4, 昭和 26 年 9 月。
- (6) 柳金太郎外：醫事公論，第 1273 號，昭和 11 年 12 月。
(東京醫齒大・内科)

各種カルシウム鹽の生体内吸収利用に関する研究

Studies on the utilization and absorption of various calcium salts in the body

古 武 彌 三
(Yazo Kotako)

日本人の食餌は Ca が少くて P が多く Ca と P の比は 1:7 に及ぶと咽えられる。従つて Ca の吸収利用率

は低いものと考えなければならない。又アメリカの疫癘研究團は日本にのみ發生する疫癘について研究し、疫癘